平井呈一訳「耳なし芳一のはなし」における、つくられた日本らしさ

Constructed Japaneseness in Teiichi Hirai's Translation of "The Story of Mimi-nashi-Hōïchi"

桑田日菜子
Hinako KUWATA

アブストラクト

「耳なし芳一」は、多くの人が知るキャラクターであるが、それが、ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850~1904）による、"The Story of Mimi-nashi-Hōïchi"（1904）の主人公だということは、実はそれほど知られていない。ハーンという外国人による英文学の中のキャラクターが、日本語読者にこれほど知られている背景には、邦訳が深くかかわっているだろう。中でも、平井呈一による邦訳版は、特に高く評価されている。しかし、この平井訳は、日本語読者にとっての読みやすさを追求するあまり、ハーンの原文には存在しなかった平井独自の要素や解釈を過剰に含む可能性がある。この視点に基づき、平井による「耳なし芳一のはなし」（1940）と、それと対照的にハーンの原文を忠実に邦訳した円城塔による「ミミ・ナシ・ホーイチの物語」（2022）、そしてハーンによる原文"The Story of Mimi-nashi-Hōïchi"の三つのテクスト間の比較を通して、平井訳を批判的に再考した。その結果、平井訳では、原文では見られなかった独自のセリフや音が追加されていたり、芳一と和尚という主要な登場人物同士の関係性が大きく変化したりしていたということが明らかになった。これらは、ハーンによる原文を、平井が、日本語読者にとって自然に受け入れやすい物語になるように邦訳した結果である。しかしながら、そこには、平井独自の解釈が入り込んでいることに加え、平井の邦訳では、ハーンが原著に込めた思いやハーン独自の視点を伝えきれていないということが明らかに

なった。

キーワード：
Lafcadio Hearn/平井呈一/円城塔/邦訳/翻訳

1．はじめに

「耳なし芳一」といえば、怪談話に登場する非常に有名なキャラクターであり、多くの人は、話の内容に加えてあの恐ろしい挿絵まで想像できるかもしれない。しかしながら、それがもともと、ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）によって、英語で書かれた、*Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*（1904）に収録されている“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”の主人公であるということは、作品自体の知名度と比較すると、あまり知られていない事実であろう。ハーンという外国人による英文学作品が日本語読者にここまで浸透した背景には、「ハーンがその書き物で彼自身を日本に commit している度合いの深さというか高さというか、それが彼の文学を日本人のものにしているのである」（森, 1980, p.153）という記述にまとめられるように、著者であるハーンが有していた、日本や日本文化に対する深い造詣とまなざしはもちろん、原文の日本語への翻訳、つまり邦訳が大きくかかわっていると考えられる。しかしながら、これほどまでに日本語読者にとって読みやすく、受け入れやすい邦訳版の誕生とその浸透は、ハーンの原文に忠実な訳出の結果というよりは、訳者独自の視点からの再解釈を伴った訳出が行われた結果だという可能性が高い。つまり、ハーンの原文が日本語に翻訳される過程で、日本人読者に合わせた要素や解釈の追加というような、受容化がおこなわれた結果だということだ。その結果、ハーンの作品とキャラクターは、日本国内で高い知名度を獲得し、今なお多くの人に親しまれていると考えられるだろう。とりわけ、平井呈一という訳者による邦訳は非常に高い評価を獲得しているが、その邦訳において、平井独自の視点からの作品の再解釈や再構築が行われた可能性は高い。そこで本稿では、ハーンによる原文“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”と、平井呈一による「耳なし芳一のはなし」（1940）、そして、円城塔に

よる同原文の邦訳『怪談』（2022）内の「ミミ・ナシ・ホーイチの物語」との比較を通して、改めてこの平井訳を批判的に検討していくこととする。

2．ハーンおよび、彼の著作について

ハーンは、その生涯を通して、様々な土地で執筆活動を行ってきた人物である。1998 年出版の『富山大学ヘルン文庫所蔵小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）関係文献目録：改訂版』内の年表をもとに、ハーンの人生について次に簡単に概観する。ハーンはギリシャのイオニア諸島出身であるが、その後、アイルランド、イギリス、シンシナティ、ニューオーリンズ、そしてマルティニーク島など、様々な土地で生活した。日本を訪れたのは、1890 年、ハーンが 40 歳の折である。その後 45 歳で日本に帰化し、小泉八雲と名乗るようになるが、彼が 54 歳で亡くなったことを考えると、実は日本で過ごした時間はそれほど長いとはいえない。しなしながら、ハーンが書いた「十九冊の書物のうち、十一冊までが日本時代に書かれた日本に関するもの」（坂東, 2000, p.571）であることからも見て取れるように、日本という国や日本の文化からハーンが受けた影響は絶大であり、それが彼の著作にも反映されたということができるだろう。

本稿で議論の中心となる“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”は、*Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*（以下 *Kwaidan*）内に収録された作品のうちの一つである。これもまた、ハーンが日本にいた時代に執筆されたもので、ハーンの晩年、1904 年（明治 37 年）に出版された。この、*Kwaidan* という作品全体における重要な特徴は、この作品が再話文学という形をとっているという点である。再話とは、『明鏡国語辞典』によると、「昔話・伝説・民話などを、現代的な表現に改めるなどしてまとめなおすこと。また、その話。」と定義されるが、ハーンが行った「再話」はそれとは異なっている。彼は、妻である日本人、小泉節子（以下セツ）による語りを通して、物語を理解し、解釈し、執筆を行ったのだ。遠田（2000）は、これを、「『口述』形式を通過させた言語間の『再話』という奇妙な形式」（p.121）とまとめている。ハーンは、セツに暗記した物語を単にそのまま伝えさせるのではなく、セツ自身の解釈で、それを演じる

ことも求めた。つまり、セツは、語り手であったと同時に、演出家や役者という役割も果たし、ハーン独自の「再話」に必要不可欠な存在であったといえるだろう。

このような、ハーンとセツという二人独自の「再話」を通して、できあがった作品が *Kwaidan* であり、その冒頭を飾る物語こそ、“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”なのである。これは、源氏と平氏の争いに決着がついた、壇ノ浦を舞台にした物語である。壇ノ浦の阿弥陀寺の和尚のもとには、芳一という非常にすぐれた琵琶法師がいた。彼は、和尚が不在のある夜、見知らぬ侍に導かれた先の屋敷で壇ノ浦の段を語り、絶賛される。しかし後日、こっそりとあとをつけた寺男たちが目にしたのは、安徳天皇の墓の前で一心不乱に琵琶を演奏する芳一の姿であった。芳一が見た屋敷や、聞いた声は幻だったのだ。和尚は、芳一が何者かに憑りつかれていることを確信し、彼を救うために芳一の全身に経文を書く。再びやってきた例の侍は、芳一の体に書かれた経文のために、彼の姿を目にすることはできなかった。しかし、芳一の耳には経文が書かれていなかったため、侍はその耳をもぎとって去っていく。その後、芳一の危難のうわさはひろまり、彼は「耳なし芳一」として有名になる、という物語である。ハーンは、*Kwaidan* に収録されている話の中でも、この物語に特に思い入れがあり、「思い出の記」（小泉 & 小泉, 1991）においては、「芳一の話は大層ヘルンの気に入った話」（p.23）であり、「もとは短い物であったのをあんなに致しました」（p.23）と語られている。

3．ハーン作品の邦訳と、平井訳の再考の必要性

このような、ハーンとセツ独自の手法で完成した“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”および *Kwaidan* は、現在では日本で広く受け入れられ、親しまれている。ハーンによる原文が英語であったことを考えると、この英文学作品が、日本で広く読まれる背景には、やはり邦訳の存在が大きくかかわっているだろう。*Kwaidan* を含め、ハーンの作品の多くは、様々な訳者によって邦訳され、日本国内に浸透してきたが、数ある邦訳の中でも、特に、平井呈一という訳者による邦訳は、非常に高い評価を得ている。平井は、英米の怪奇文学を中心に

翻訳した人物であり、1964 年から 1967 年にかけて恒文社より刊行された『全訳小泉八雲作品集』において、ハーン作品の完訳を担当した。*Kwaidan* の邦訳である、『怪談―不思議なことの物語と研究―』（1940）もまた平井の重要な功績のうちの一つに数えられる。平井訳全般の特徴に関して、坂東（2000）は以下のように評価する。

> 平井訳の特色は、なんといっても絶妙な達意の訳文にある。自由訳的色彩の濃い平易明快な訳文は、ハーンの流暢な文体の魅力を見事に移植している。とりわけ日本関係の著作は、江戸文学の伝統につながる文人の軽妙な筆運びで日本的な機微を色濃く滲ませた文章になっているため、原文から遊離しているのではないかと危惧するほどである。
>
> （坂東, 2000, p.572）

また、風早（2019）も、平井による邦訳は、もはや一つの日本語作品として完成されたものになっていると述べている。これらの評価から、平井による訳は、ハーンによる英語で書かれた原文の存在を、ときに忘れさせてしまうほどに、自然で、日本らしいものであるということができるだろう。

しかしながら、日本語読者にとってあまりにも読みやすく、受け入れやすい平井の邦訳は、果たして外国人であるハーンによる作品の翻訳といえるのだろうか。平井が、ハーンの作品を日本語読者にとってなじみやすく、受け入れやすいものにすることを目的にするあまり、ハーンの意図や独自性が時に取りこぼされ、平井独自の文学作品になっている可能性もあるのではないか。文学作品の翻訳に関して、永田（2018）は、翻訳作品が保持すべき原文の要素を次の四点と定義している。なお、ST とは、原文（source text）のことを指す。

①原作にこめられた原著者のメッセージ
② ST で指示される登場人物や事物（構成要素）および各構成要素間の関連
③原作の文体や風格

④原作の位置づけ（児童文学、時代小説、現代小説、推理小説、科学幻想小説など）

（永田, 2018, p.61）

前述したように、坂東（2000）や、風早（2019）らは、平井訳の文体や物語全体の完成度を高く評価していたが、それは永田の条件と照らし合わせると、③原作の文体や風格 の点を保持していない可能性も示唆している。風早（2019）は、特に物語中の原注や説明的描写に着目しながら、の“The Story of Mimi-Nashi-Hōïchi”の斎藤正二訳と平井訳との間でテクスト比較を行った結果、平井訳では、ハーンによる原注がすべて削られていることに加え、原文の簡潔なまとめなおし、独自の要素の追加、さらに原文にあった要素の削除などといったことが行われていることを明らかにした。風早（2019）は、このような平井の邦訳は、あくまで日本人にとっての読みやすさを優先した結果であり、「日本語としてこなれた結果、日本を外から見るハーンのまなざしが薄れてしまう」（p.40）ことを指摘している。風早（2019）の研究から、平井による邦訳は、ハーンという外国人が描いた日本の怪談、という英文学作品から、日本人に向けた日本語作品として完成度を高めなおしたという作業に近いということが示唆され、永田（2018）の条件と照らし合わせると、①原著者のメッセージ や ④原作の位置づけ という点を完全に保持できているとはいえない可能性を示している。

そこで、本稿では、特に永田（2018）の条件のうち、特に ② ST で指示される登場人物や事物（構成要素）および各構成要素間の関連 と ③原作の文体や風格 という点に着目し、「平井訳には、どのような原文にない独自の表現や解釈が見られるのか」という問いを明らかにすることを通して、平井訳を批判的に再考することを目的にする。

4．研究方法

前述した問いを明らかにするために、本稿では、ハーンによる英語で書かれた原文、*Kwaidan*（1904）内の“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”、平井による邦訳

版『怪談―不思議なことの物語と研究―』（1940）内の「耳なし芳一のはなし」、そして円城塔による邦訳版である、『怪談』（2022）内の「ミミ・ナシ・ホーイチの物語」との比較を行うこととする。

今回、平井訳との比較をおこなう対象として円城による邦訳を取り上げたのは、両者が経歴と邦訳のスタイルの二つにおいて大きく異なっているためである。まず、二人の経歴の違いに関して述べると、平井が英米文学の翻訳を手掛けた人物である一方、円城は翻訳者ではなく、作家として著作を発表している人物なのである。彼の 2012 年の著作『道化師の蝶』は芥川賞を、2017 年の『文字渦』は川端康成賞を受賞している。次に、両者の邦訳のスタイルという点に関しては、平井訳が、原文の存在を忘れさせるような邦訳であるとすれば、円城訳はそれとはまったく対照的なのである。というのも、原文出版当時の英語読者にとって、この作品がどう映ったかということを円城自身が考えたところが、彼の邦訳の出発点だからである。円城は、ハーンの原文をめぐっては、日本という未知の国における話を、あえて未知のまま、英語読者に届けようとしたハーンの流儀と、それに触れた当時の英語読者の困惑や戸惑いがあったはずだ、と『怪談』（2022）のあとがきで述べている。つまり、ハーンは、彼の目線を通してとらえた日本の怪談や文化を、異質化の方略をとって執筆したのである。円城は、同じくあとがきの中で、邦訳の方法次第では、我々現代の日本語読者であっても、ハーンの *Kwaidan* を、当時の英語読者と同様の驚きと想像力を伴って読むことが可能になると考えたとも述べている。円城は、*Kwaidan* を現代の日本語読者にとって理解しやすく想像しやすいかたちにせず、読者個々人の想像力や読み方に任せるような邦訳をおこなった。そうすることで、時代を超えた追体験を可能にしようとしたのである。その目的のための具体的な邦訳方法に関して、朝宮（2022）による、インタビュー内で、円城は次のように語っている。

> これまでの翻訳ではハーンが参考にした資料にあたって、ふさわしい漢字を当てるというやり方がメジャーでしたが、当時の英米の読者はよく分からずに読んでいたわけですよね。その感じに近づけるには、片仮名

表記のままがいいなと。ハーンが書いていないことは原則書かない。
（朝宮，2022）

この発言からも、円城は、極力ハーンの原文を尊重したかたちでの邦訳を目指しており、現代日本語話者にとってのわかりやすさの実現以上に、当時の英語読者にとってのわかりにくさの再現を目指したといえるだろう。つまり、ハーンによる原文出版当時の読者と同じような混乱と想像を引き起こさせるような邦訳になっているのだ。そしてこれは、平井による、日本人にとって受け入れやすい邦訳とは正反対であり、円城訳を読むとき、読者はハーンの原文の存在を感じずにはいられないだろう。

５．翻訳比較

さて、ここからは、平井と円城という二人の訳者による、対照的な訳を比較した結果と、それに対する考察を述べていく。本文中の表では、比較した部分の原文、平井訳、円城訳を並べて示し、場面の説明を追加した。

まず、はじめに着目したいのが、平家の怨霊という要素である。“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”において、平家は非常に重要な存在であり、物語冒頭から登場する。しかし、それにかかわる訳出は、２つの訳の間で微妙に異なっている（下線筆者）。

平家の怨霊に関する説明①

原文	And that sea and shore have been haunted for seven hundred years…. (p.3)
平井訳	その後七百年のあいだ、壇の浦と海のあのへん一帯の浜べは、久しいこと平家の怨霊にたたられていていた。(p.9)
円城訳	以来七百年、このあたりの海や浜辺は幽霊のさまよう場所として恐れられることになる……。(p.9)

平家の怨霊に関する説明②

原文	In former years the Heiké were much more restless than they now are.（p.4）
平井訳	昔はしかし、そうした平家の怨霊も、こんにちに比べると、もっともっとさかんに跳梁していたものであった。（pp. 9-10）
円城訳	これでもかつてそうだったより、ヘイケ一族は平穏を得ているのである。（p.9）

上に示したなかで注目したいのが、平井訳における、平家の怨霊という要素の強調や、平家の恐ろしさの強調である。下線が示すように、平井は、平家という単語に伴って、「怨霊」という要素を追加して邦訳を行っているのだ。また、ハーンの“In former years the Heiké were much more restless than they now are.”という原文に対して、円城がかつてそうだったよりは平穏である、と平家の変化を肯定的にとらえて訳している一方で、平井訳では、怨霊がかつては今以上に跳梁していた、と過去の恐ろしさに焦点をあてるかたちになっている。違いが表れている部分をさらに以下にまとめた（下線筆者）。

平家の怨霊に関する説明③

原文	They would rise about ships passing in the night, and try to sink them; and at all times they would watch for swimmers, to pull them down.（p.4）
平井訳	夜、沖を通りかかる船のほとりにあらわれて、その船を沈めにかかったり、あるいは海で泳ぐ者などがあると、それを待ちかまえていて、いきなり水の底へひきずりこんだりしたものだ。（p.10）
円城訳	夜に漕ぎ出す舟の傍らへ現れ沈めようとし、泳ぐ者を見かけたならば引きずり込もうとしたものだった。（pp.9-10）

これは、平家の怨霊がかつてどのように人々を困らせていたかを具体的に描写した部分であるが、ここにも違いがみられる。平井は、原文における“try to

sink”を、「沈めにかかったり」と訳していることに加え、「待ちかまえていて」「いきなり」という言葉を追加して訳すことで、怨霊の悪質さを印象づけるような描写を実現しているのである。

ここまで見てきたような平井訳における平家の恐怖の描写は、物語において、大きく二つの役割を果たしていると考えられる。まず、恐怖の増幅である。物語の冒頭で、平家の怨霊という存在や、それの恐ろしさを強調しておくことで、読者は平家の怨霊に恐怖を抱いた状態で物語を読み進めることになるのである。しかしながら、これは、ハーンの想いを十分に反映しているとは言えない。なぜなら、ハーンは、*Kwaidan* を単なる恐怖短編集にしたかったわけではないからである。遠田(2000)によると、ハーンのアメリカ時代以降の作品においては、「超自然と人事が、怪奇と道徳が、分かちがたく結びつき、美しく見事に均衡している」(p.120)とし、「人倫社会を成り立たせている根源的な力」(p.120)として位置づけられていると主張する。また、ハーン作品に登場する怪奇と、読者との対話に関して、池田(2009)は次のように指摘する。

> それらの霊的存在に共通している要素は、いわゆる怪奇小説や怪談ものにありがちな人間の恐怖心をたんにあおるものではなく、何か人間の根源にある存在の悲しみや孤独感、畏怖心や愛しさの情感に訴えかけるところにあると思われる。
>
> (池田, 2009, p. 136)

ハーンは、霊的存在を人間の道徳心や人間社会そのものと結びつけてとらえて描き出そうとしたのである。平井訳における、過剰なまでの平家の怨霊の恐ろしさの強調は、このハーン独自の視点を尊重しているとはいえないだろう。

そして、恐怖の演出に加え、この描写が果たす二つ目の役割が、伏線である。この冒頭部分で、平家の怨霊という言葉を繰り返し登場させたり、その恐ろしさを十分に示したりしておくことは、今後の展開の伏線になっている。つまり、たとえ物語中で明記されていなくとも、芳一に憑りついたのは、平家の怨

霊だったということに気がつきやすくなっているのだ。これは、読者にとって、よりわかりやすい物語を作ることに貢献しているといえるかもしれない。しかしながら、この「貢献」は、平井という訳者が、原文にない要素を追加したり、原文の描写を独自に強調したりしたことによってうまれたものである。ここでの演出や、伏線的役割に関しても、かならずしもハーンの意図を汲んでいるとは言えず、平井独自のものであり、邦訳の域をこえているといってよい。

さらに平井訳と円城訳を比較していくと、平井訳には、オノマトペの追加という特色があることが明らかになった。物語全体を通して、原文では具体的な音があてられていないものに対して、平井によって、オリジナルの擬音語や擬態語を付け加えられたうえで邦訳された部分が多くみられたのだ。その部分を引用し、以下にまとめた（下線筆者）。

芳一が初めて屋敷へ向かう場面

原文	The hand that guided was iron; and the clank of the warrior's stride proved him fully armed, — probably some palace-guard on duty.（p.7）
平井訳	引いてくれるその手は、くろがねであった。そして、大股にのっし、のっしと歩いていくその足並みにつれて、かつかつと物のうち鳴る音のするのは、身に甲冑をみにつけている証拠である。おそらく、宿直の衛士かなにかなのであろう。（p.13）
円城訳	引く手は鉄のようであり、戦士が歩を進めるたびに響く音からは、正式に武装していることがうかがわれ—おそらくはどこかの宮殿の護衛を務めているのだろう。（p.12）

芳一が初めて屋敷に到着した場面

原文	Then came sounds of feet hurrying, and screens sliding, and rain-doors opening, and voices of women in converse.（p.8）

平井訳	すると、いそいそと奥から出てくる人の足音、するすると襖のあく音、がらがらと雨戸をくりあける音がしたと思うと、女の話しあう声がわやわやと聞こえてきた。(p.14)
円城訳	慌ただしい足音や、スクリーンがスライドする音、雨戸がひらく音、女性たちの話し声が届いた。(p.13)

芳一の耳がとられる場面

原文	At that instant Hōïchi felt his ears gripped by fingers of iron, and torn off! (p.18)
平井訳	そのせつなであった。芳一は、くろがねの指に両の耳をむずとつかまれたと思うと、たちまち、びりびりと引き裂かれるのをおぼえた。(p.24)
円城訳	その瞬間、ホーイチは鉄のような指で耳を摑まれたのを感じ、そして耳が引きちぎられた！ (p.22)

平井訳においては、ハーンの原文で具体的な音が示されていない、“clank”や“sounds”に対して、それぞれ特定の音があてられている。対して、円城は、あくまで「〜の音」といったかたちで訳出するのにとどめ、具体的な音は読者の想像にまかせている。さらに、平井は音を具体化することだけにとどまらず、原文でたとえ音について言及されていない場合であっても、「のっし、のっし」「むず」という擬態語や「びりびり」という擬音語を追加しているのである。このような音は、ハーンおよび語り手のセツがイメージした音と必ずしも同じとは言えない。さらに、このような平井による独自のオノマトペの追加は、物語の中でも特に、主人公である芳一にとって音の重要度が高まる場面において多く見られるという特徴もある。この物語の中で、音は、盲目の芳一が外界を知るための重要な要素であり、彼にとっての情報源である。平井訳において、原文でハーンによって具体的に示されていない音が特定されたり、追加されたりしているということは、物語自体にも、平井の解釈が入り込んでくるということに他ならない。

そして、擬音語や擬態語といったオノマトペが追加されていたことに加え、平井訳ではさらに、原文にはないセリフが追加されている場面も多くみられた（下線筆者）。

和尚が芳一に、寺へ住むことをもちかける場面

原文	Afterwards, being much impressed by the wonderful skill of the lad, the priest proposed that Höichi should make the temple his home; and this offer was gratefully accepted.（pp.5-6）
平井訳	和尚は、年わかい芳一の妙技にいたく執心して、のちには、どうじゃな、よかったら寺へきて住むことにしては、とまでいってくれたので、芳一はその恩に感じて、よろこんで和尚の申し出を受けた。（p.11）
円城訳	少年の素晴らしい技に深く感じ入るようになった僧侶は、寺へ住むようホーイチに提案し、その申し出は有り難く受け入れられた。（p.11）

芳一が屋敷の大名と対面する場面

原文	Höichi was told to put himself at ease, and he found a kneeling-cushion ready for him.（p.9）
平井訳	らくにせい、といわれて、芳一がはっと気がついてみると、自分の前には、柔らかな円座がいちまい敷いてある。（p.15）
円城訳	ホーイチは楽にするように言われ、膝を折って座るためのクッションが用意されているのに気付いた。（p.13）

ここに挙げた場面の下線を引いた部分からわかるように、平井訳においては、原文には存在しないセリフが追加される場面が見られた。こういったセリフは、原文に存在するセリフとは異なり、鍵かっこなしで本文中に挿入されているという工夫があるものの、「じゃ」「せい」といった登場人物固有の役割語まで忠実に再現しており、原文の時点でそこに存在していたかのような印象すら受ける。もちろん、追加されたセリフの内容はハーンによる原文の

描写に基づくものであり、セリフから読者が得られる情報は、原文と相違はないかもしれない。しかし、伝える内容は同じであっても、その伝え方や言い回しは無数にあるはずである。それにもかかわらず、平井によって一つに定められたセリフが採用されており、このようなセリフはハーンが思い描いていた発話とも言い切れない。物語中のセリフにも、平井独自の視点からの解釈が入り込んできているといえるだろう。

ここまでは、平井訳に見られる、平家の怨霊の恐怖の演出や、登場人物のセリフなどといった、独自に追加された要素に焦点をあててきた。ここからは、原文中の特定の要素に着目して、平井と円城がどのような訳出を行ったかに目を向けていく。まず、とりあげたい要素が、the という単語である。The は英語に特有の定冠詞であり、日本語話者にとっては、あまりなじみのない概念である。それぞれの訳者が the をどのようにとらえ、訳出したかを以下にまとめた（下線筆者）。

The の訳出の比較

原文	平井訳	円城訳
After the temple had been built, and the tombs erected, … (p.4)	この阿弥陀寺が建立され、いま言うような石碑が立てられてからは、… (p.10)	寺が建てられ、墓石が据えられてからは、… (p.10)
The woman's voice made answer: (p.9)	すると、さいぜんの老女の声がこたえた。(p.15)	女性の声は答えた―。(p.14)
the deep voice (p.17)	例の太い、力のこもった声が (p.23)	底力をこめた声が (p.21)

原文中で the は、既出の名詞や、直前で言及があった名詞に付いている。そこで平井は、the がついている名詞に対して、すでに言及したことがわかりやすいような日本語を補ったうえで訳出している。そうすることによって、日本語読者が、無理なく名詞を特定できるようにしているのだ。上記の表が示

すように、the という一単語にあてられている日本語は実に多様であり、平井の工夫を垣間見ることができる。一方、円城訳では、the という一単語に対しての訳出は行われておらず、あくまで the 以降の名詞のみを訳出するというかたちになっている。ハーンが原文に記したままを邦訳したい、という円城の立場にたってみると、この判断は当然といえるだろう。しかし、原文を英語で読んだ英語読者の立場にたってみると、the のついた名詞がどの既出名詞を指すのかを特定することはたやすい。つまり、平井があえて訳出している部分を、英語読者は自然に察することができるのだ。英語読者は、the という単語から、円城訳以上の情報を得ることができているともいうことができる。つまり、この点では、言葉を追加して訳した平井訳のほうが、結果的に、原文読者の追体験という円城訳の目的を達成できているともいえるだろう。

ここまでで、平井が独自の解釈を行ったうえで、要素を追加しながら邦訳を行っていることを明らかにしたが、平井訳における、原文からの非常に大きな違いがある。それは、芳一と和尚の関係性の描き方だ。芳一は物語の主人公であるが、和尚は、その芳一を助ける存在だ。和尚は、芳一に衣食住を提供しただけでなく、怨霊に憑りつかれた芳一を救うために、全身に経文を書くことを提案した人物でもある。原文と邦訳版での二人の関係性の違いを示すために、まずは、芳一から和尚に対する関係性が見て取れる部分の描写の部分を次にまとめた（下線筆者）。

芳一と和尚の関係性を記述した描写

原文	At the outset of his career, Hōïchi was very poor; but he found a good friend to help him.（p.5）
平井訳	まだ名もなさぬ駆けだしのころ、芳一はたいそう貧乏であったが、さいわい、なにかとうしろだてになってくれる、よい知己がひとりあった。（p.11）
円城訳	駆け出しの頃のホーイチはとても貧しかったが、彼には手を差し伸べてくれるよき友人がいた。（p.11）

和尚が芳一に、寺へ住むことを提案する場面

原文	Afterwards, being much impressed by the wonderful skill of the lad, the priest proposed that Hōïchi should make the temple his home; and this offer was gratefully accepted. (pp.5-6)
平井訳	和尚は、年わかい芳一の妙技にいたく執心して、のちには、どうじゃな、よかったら寺へきて住むことにしては、とまでいってくれたので、芳一はその恩に感じて、よろこんで和尚の申し出を受けた。(p.11)
円城訳	少年の素晴らしい技に深く感じ入るようになった僧侶は、寺へ住むようホーイチに提案し、その申し出は有り難く受け入れられた。(p.11)

芳一が和尚に嘘をつく場面

原文	"Pardon me, kind friend! I had to attend to some private business; and I could not arrange the matter at any other hour." (p. 13)
平井訳	「方丈さま、どうかご勘弁のほどを願いまするで。なに、ちと自分用がござりましてな、昼のうちについちゃっと片づけられなんだものでござりましたゆえ……」(p.18)
円城訳	「友よ、申し訳ない！ちょっとした私用で出かける用事があったのです。他に時間をとることができなかったものですから」(p.16)

芳一から見た和尚に対する描写に関して、平井訳の大きな特徴が、二人の関係性を友人とせず、恩や感謝と結びつけて描写しているという点だ。原文で、芳一から見た和尚は、"a good friend" なのであり、それを尊重した円城訳では「よき友人」という表現が使用されている。一方、同場面であっても、平井訳では「よい知己」という表現を採用し、直接的に友人とすることを避けている。さらに、芳一が和尚に嘘をつく場面でも、「友よ」と訳した円城と対照的に、平井は「方丈さま」と、様をつけて呼びかけるかたちで訳している。この、「さま」という表現に加え、平井訳では感嘆符が削除され、芳一から和尚へ、丁寧なことばで目上の相手に許しを請うセリフへと変化している。さらに、和尚から

寺へ住むことを提案するにおいても、二人の関係性の描かれ方の違いを目にすることができる。原文では、“this offer”が主語であるのに対し、平井訳では、主語が「芳一」に置き換えられたうえで邦訳が行われている。このようにすることで、主体としての芳一が、和尚からの申し出を有り難く受け取った、という文構造にしているのである。それだけではなく、「さいわい」、「とまでいってくれた」という単語も独自に加えられている。

ここまで見てきたように、平井訳では、「友人」「友」と訳すことを避けたり、独自に単語を追加したりすることで、芳一から和尚に向けた感謝や恩が強調された訳になっているのである。その結果二人の関係性は、明確な上下関係をもつものに変化しており、原文とも、円城訳とも異なった描き方に変化している。そして、平井訳では、和尚から見た芳一の関係性に関しても、原文とは異なっている（下線筆者）。

和尚が芳一に、寺へ住むことを提案する場面

原文	Afterwards, being much impressed by the wonderful skill of the lad, the priest proposed that Hōïchi should make the temple his home; and this offer was gratefully accepted.（pp. 5-6）
平井訳	和尚は、年わかい芳一の妙技にいたく執心して、のちには、どうじゃな、よかったら寺へきて住むことにしては、とまでいってくれたので、芳一はその恩に感じて、よろこんで和尚の申し出を受けた。（p.11）
円城訳	少年の素晴らしい技に深く感じ入るようになった僧侶は、寺へ住むようホーイチに提案し、その申し出は有り難く受け入れられた。（p.11）

和尚が、芳一の危難を知る場面

原文	Hōïchi, my poor friend, you are now in great danger! How unfortunate that you did not tell me all this before! Your wonderful skill in music has indeed brought you into strange trouble.（p.15）

平井訳	芳一、そなたはふびんなやつじゃ。そなたはの、いま、たいへんな危うい目に会うているのじゃぞ。こんなことにならぬうちに、早くわしに言うてくれなんだのは、なんとも不運なことであった。これというのも、みなこれは、そなたが琵琶がじょうずなばかりに、このようなふしぎな危難に会うたのじゃ。（pp. 21-22）
円城訳	ホーイチ、可哀想な我が友人よ、そなたは今大きな危機に見舞われている！もっと早くに打ち明けてくれていたならば、こんなことにはならなかったのに！そなたの図抜けた楽才こそがこの奇妙な仕業を呼び寄せたのだ。（p.19）

和尚が芳一を励ます場面

原文	Cheer up, friend! ― the danger is now well over. You will never again be troubled by those visitors.（pp. 19-20）
平井訳	芳一、したがそなた、よろこべ。元気を出せよ。危難はもはや退散したぞ。こののちは、もう二どとふたたび、あのような亡者に煩わされることは、ゆめゆめないぞ　（p.26）
円城訳	友よ、元気を出すのだ！ ― もはや危機は去った。これでもう二度とあの手の訪問者に悩まされることはなくなるだろう（p.23）

これらの描写からは、和尚から芳一をどのように見ていたかをとらえることができる。まずは、和尚が芳一に、寺へ住むことを提案する場面の“being much impressed”という原文に対する両訳を比較したい。円城訳では「深く感じ入るようになった」とされている一方、平井訳では「執心」という言葉が採用されている。『明鏡国語辞典』にて、執心とは「ある物事・人に強い関心を持ち、それにこだわること」と定義されていることからもわかるように、これは単に心が動いたという気持ち以上に、強い気持ちやこだわりをあらわす単語である。平井が、この日本語をあえて選択したことで、円城訳や原文と比較しても、和尚から芳一に対して友人関係以上の執着があるような描写になっているの

だ。また、描写⑤においても、平井の訳は、和尚から芳一個人に対する気持ちを強く感じさせるものになっている。原文の描写⑤では、最後の文の主語は、“Your wonderful skill”であり、この文を忠実に訳すと、円城訳のように、「そなたの図抜けた楽才こそがこの奇妙な仕業を呼び寄せた」となるはずである。しかし、平井訳では、主語を「そなた」とし、芳一が危難に見舞われた原因を、芳一という個人に帰着させたセリフになっているのである。

また、和尚が芳一の危難を知る場面と、和尚が芳一を励ます場面において、原文で使われている“friend”という親しみを込めた言い回しが、円城訳で「友人」「友」と訳されている一方、平井訳ではそのような呼びかけは採用されておらず、かわりに「そなた」や「芳一」という呼びかけがされている。さらにこれらの場面で、和尚のセリフに見られる感嘆符は、平井訳ではすべて削除されている。原文の、和尚が芳一を励ます際の“Cheer up”というセリフに見られるような、和尚の発話の明るさや軽やかさは消え、落ち着いた口調で芳一を諭すような発話に変化しているのだ。

ここまで見てきたように、平井訳において、芳一と和尚の関係は、原文と比較するとかなり異なった描き方がなされている。芳一から和尚に対しては、恩や感謝を伴った見方がされ、和尚から芳一に対しては単なる関心以上の強いこだわりをもった見方がされたものになっている。また、芳一から和尚に対しては丁寧な尊敬の言葉遣いが、和尚から芳一に対しては丁寧に諭すような言葉遣いが採用されていた。

このような平井訳のなかの二人は、原文で描かれたようなお互いに友人という対等な友人というよりは、明確な上下の関係にある。このような描き方は、日本人にとって、いっそう受け入れやすい物語をつくることに貢献している。日本において、立場も年齢も異なる二人の間に友人関係を見出すことは難しく、助けてもらう側と、助ける側という二者間では、なおさら「友人」というラベルをつけることは難しくなると考えられるからである。一方、恩や感謝を伴った、明確な上下関係というのは、日本人にとってはなじみ深く、非常に受け入れやすいものであろう。平井は、物語の中の中心的な登場人物二人の関係性を、日本人にとって、無理なく受け入れられるかたちに変え、物語と

しての完成度を高めたのだ。しかし、これは“The Story of Mimi-nashi-Hōïchi”を通して、ハーンが描きたかったものだといえるのだろうか。実は、物語中の和尚と芳一の関係性には、ハーン自身の経験が反映されているとの見方もある。例えば、中田(2000)は、芳一と和尚という二人のキャラクターの関係性と、その描き方は、ハーン自身が、シンシナティ時代、ヘンリー・ワトキンという老人に支援してもらった過去を想起させると述べている。高橋(2006)によれば、ワトキンとは印刷屋の老人で、ハーンに植字工や校閲の仕事を教えながら、彼の世話をした人物絵あり、ハーンの心のよりどころでもあった人物である。中田(2000)は、このワトキン老人と、ハーンとの関係性が、「耳なし芳一のはなし」の和尚と芳一の関係性に反映されていると主張しているわけである。ハーンが、物語にどこまで自身の経験を反映させたかは定かではないが、平井訳が、日本の読者を想定した結果、芳一と和尚という二人の関係性すらも変えてしまっており、ハーンの原文を尊重した訳になっていないということに疑いの余地はない。

最後に、平井訳と原文で描写に大きな違いがあった場面について述べる。それは、次にまとめる、物語のクライマックス付近の描写である(下線筆者)。

原文	But he perceived Hōïchi sitting there, in the attitude of meditation — with the blood still oozing from his wounds. (p.19)
平井訳	見ると、芳一は、縁のはなに三昧の姿勢をとったまま、じっと端坐している。— 傷口からしたたる血汐に、朱に染まりながら。(p.25)
円城訳	しかし、彼はホーイチが瞑想の姿勢でそこに座っていることに気がついた — 傷からはまだ血が流れている。(p.22)

これは、和尚が、耳を取られた芳一の姿を発見する部分である。中でも特に着目したいのが、原文におけるダッシュ記号以降の邦訳である。円城訳が、原文の各要素を忠実に訳している一方、平井訳では、「朱に染まりながら」という要素が大胆にも追加されているのだ。これは、このシーンをより印象的で

鮮烈なものにしているが、平井独自の過剰な演出であり、邦訳の域を出ているというほかないだろう。

6．考察

ここまで、ハーンによる“The Story of Mimi-Nashi-Hōīchi”、平井による邦訳版「耳なし芳一のはなし」、そして円城による邦訳版「ミミ・ナシ・ホーイチの物語」の三種類のテクストを比較してきた。第 3 章で示した、「平井訳には、どのような原文にない独自の表現や解釈が見られるのか」という問いに対しては大きく四つの結果が明らかになった。まず一つ目の結果として、物語中の「平家」という要素に対して、平井は独自に恐怖を強調するような訳を行っていたということがあげられる。これは、伏線としての役割を果たしたり、恐怖を強調したりすることで、日本語読者にとっての物語の完成度を高めていた。続いて二つ目の結果として、原文に描かれていない、独自の音やセリフなどの表現を追加していたということがあげられる。平井独自の解釈に基づいて、原文中の音を具体化したり、原文の描写に基づいて、登場人物の役割語を採用しながら、新しくセリフを追加したりしていた。次に三つ目の結果として、the という英単語に対して、日本語読者が読みやすいような表現を補完したうえで、訳していたということがあげられる。これは、英語独自の要素である the を、日本語読者にとって自然なかたちにした結果である。最後に四つ目の結果として、和尚と芳一という二人の登場人物の関係性が、原文と異なったかたちで描かれていたということがあげられる。平井訳において、芳一から和尚に対しては、恩や感謝を伴った見方がされ、和尚から芳一に対しては単なる関心以上の強いこだわりをもった見方がされていた。芳一から和尚の感謝や恩が平井独自に追加され、尊敬語を伴った発話になっていた一方、和尚の口調からは感嘆符が削除され、諭すような口調に変化していたことも大きな特徴だ。これは、多くの日本人にとっては、和尚と芳一という年齢も立場も異なる二人を友人として受け入れにくいだろうということを想定し、二人を上下関係としてとらえなおすことで、日本人にとっての読みやすさを追求した結果である。

ここで再び永田(2018)による、文学作品の翻訳が満たすべき要素を提示したうえで、前述の平井訳の特徴と比較して考察してみたい。永田(2018)は、文学作品の翻訳においては、①原作にこめられた原著者のメッセージ、② ST で指示される登場人物や事物(構成要素)および各構成要素間の関連、③原作の文体や風格、④原作の位置づけの四点が保持される必要があると主張していた。

今回の分析を踏まえてみると、まず、①原著者のメッセージという点に関しては、平井が平家の怨霊の恐怖を増幅するような描き方をしていた点から、霊的存在が、人間社会に必要不可欠であるという見方や、人間の根源とかかわる存在である、というハーン独自のメッセージを尊重できているとはいえず、保持されていないといえるだろう。さらに、ハーンの原文で対等な友人であった、和尚と芳一という二人を、日本人が受け入れやすいかたちの上下関係として描きなおし、二人の口調に関しても平井独自の変更がなされているという点から、②構成要素間および各構成要素の関連 についても保持できているとはいえない。さらに、和尚と芳一の口調が変化していたり、平井独自の音が追加されたりしていた点から、③原作の文体や風格 に関しても保持できていない部分が多数あるということが言えるだろう。

本稿では、ハーンによる原文、平井による邦訳、そして円城による邦訳の三種類のテクストを比較することを通して平井訳を批判的に再考してきた。平井訳における独自の解釈や要素の追加は、平井が日本語読者や日本人にとっての受け入れやすさ、読みやすさを目指した結果である。そのおかげで、この物語は、多くの人が知り、今でも広く親まれる物語となっている。しかしながら、平井による訳においては、原文での登場人物や音、そして発話に関して独自の解釈が入り込んでおり、さらにはハーンが原著 *Kwaidan* に込めたメッセージを伝えきれないという結果にもつながっていたのである。

引用文献

Hearn, L.（1904）. The Story of Mimi-nashi-Hōīchi. In *Kwaidan: stories and studies of strange things*（pp. 3-20）. Kegan Paul, Trench, Trübner

朝宮運河.（2022 年 10 月 25 日）. 円城塔さん「怪談」インタビュー「直訳」で浮かび上がる不思議の国・日本. *朝日新聞デジタル*. https://book.asahi.com/article/14742665

池田雅之.（2009）. *ラフカディオ・ハーンの日本*. 角川学芸出版

風早悟史.（2019）. ラフカディオ・ハーンの「厚い」翻訳―“The Story of Mimi-Nashi-Hōïchi” の邦訳を例に. *山陽小野田市立山口東京理科大学紀要*,（2）, 35-41.

小泉節子, & 小泉一雄.（1991）. *小泉八雲 : 思い出の記 ; 父「八雲」を憶う*（2nd ed.）. 恒文社.

再話.（n.d.）. In 北原保雄（編）, *明鏡国語辞典*（第 2 版）［電子辞書版］. 大修館書店.

執心.（n.d.）. In 北原保雄（編）, *明鏡国語辞典*（第 2 版）［電子辞書版］. 大修館書店.

遠田勝.（2000）.『怪談』. In 平川祐弘（監修）, *小泉八雲事典*（pp. 120-123）. 恒文社.

中田賢治.（2000）.「耳なし芳一のはなし」. In 平川祐弘（監修）, *小泉八雲事典*（pp. 616-617）. 恒文社.

ハーン, L.（2022）. ミミ・ナシ・ホーイチの物語（円城塔訳）. In *怪談*（pp. 9-25）. 角川書店.（原著 1904 年）

ハーン, L.（1940）. 耳なし芳一のはなし（平井呈一訳）. In *怪談 ―不思議なことの物語と研究―*（pp. 9-26）. 岩波書店.（原著 1904 年）

坂東浩司.（2000）. 邦訳. In 平川祐弘（監修）, *小泉八雲事典*（pp. 571-575）. 恒文社.

永田小絵.（2018）. 芥川龍之介の翻案に見る受容化の方策. *マテシス・ウニウェルサリス*, 20（1）, 57-84.

森亮.（1980）. *小泉八雲の文学*. 恒文社.